

トーク

香川京子（女優）

映画は大きなスクリーンでみてほしい

聞き手：田井肇 コミュニティネマセンター代表理事／大分シネマ5代表

デビューのころ

私は自分が女優になるとは夢にも思っていませんでした。ひっこみじあんでおとなしい子どもでしたし、映画もあまりみていませんでした。女学校の卒業を控えて、何か自分の仕事といえるものを持ちたいという気持ちが強くなりました。

もう60年以上も前ですが、ちょうど卒業間際の1月ごろ、東京新聞がニューフェースを募集して各映画会社に推薦するという記事が出まして、突然決意して応募したのです。忘れたころになって一次審査が通ったという知らせがきましたが、会社の就職試験もうけていて、その最終面接とカメラテストが同じ日に重なってしまいました。人生の分かれ目だと思いましたね。母がやりたいほうをやってみればと言ってくれたので、カメラテストに行き、新東宝に入ることができたのです。

当時の新東宝には高峰秀子さん、田中絹代さん、上原謙さんなどそうそうたる先輩がたくさんいらっしゃいました。私は、半年ぐらいはエキストラで、だんだん妹役専門でお仕事させていただくようになりました。

『おかあさん』

成瀬巳喜男監督の『おかあさん』（1952）は、デビュー3年目にめぐりあった作品です。私はのんびりしているもので、自分の個性がどういう役に向いているかということを考えたことがなかったのですが、『おかあさん』に出演して、私はこういう明るい庶民的な娘役に向いているのかな、と初めて女優として意識しました。女優というお仕事には、ある“段階”



というようなものがございまして、その段階が、一段上がったかなと思える作品がいくつかございますが、『おかあさん』はその最初の作品でしたね。

女優になってからは、勉強のため、よく映画をみにいきました。新宿の小さな映画館に通ってジャン・ギャパンのフランス映画をみました。当時は楽しみといえば映画という時代で、映画館の雰囲気はいまとは全然違っていました。どこの映画館も席はいっぱいで見客も多くて、人の頭の間からスクリーンをみている時代でした。

『近松物語』の思い出

私はたくさんの作品に出演させていただきましたが、一番印象に残っている作品というと、溝口健二

監督の『近松物語』（1954）です。どう演じたらいいのかわからなくて本当に苦しんだ作品でした。人妻役は初めて、京都の言葉は初めて、裾をひく衣装を着て演技するのも初めて、いっさいが初めての経験でした。溝口監督は演技指導をなさらないのです。何遍もテストを繰り返すだけで、どこがだめだとはおっしゃいません。本当は俳優自身がその役の気持を考えれば自然に動けるはずですが、私はその訓練ができていなくて、最後は体でぶつかっていくしかないというところまで追い込まれました。そうすると監督さんが「本番で行きましょう」とおっしゃるのです。私がそうなるのを待っていらしたのかと思います。まだ22歳のときで、溝口監督が私の中に、芝居の基本というか、一番大きなものを残してくださいました。

映画ができあがって、私は映画館にみに行きました。このときもお客さんがいっぱい、立ち見だったんですが、私のすぐそばで高校生か大学生ぐらいの青年がみていたんです。あの映画では、茂兵衛と心中しようとするシーンで、おさんが茂兵衛に「おまえのその一言で死ぬのはいやになった」と言う場面があります。初めて恋というものを知ったおさんは、死にたくない、生きていたいと思うんですね。その場面をみて、青年が「すごいなあ」というのが聞こえたんです。そのときは、すごくうれしかったです。どうしたらいいかわからないと苦しみにぬいた映画でしたから。あのような作品を若い方もみてくれて、感動してくれたんだなといまでも非常に印象に残っています。

『まあだだよ』

若い時は、いつも何かに巻き込まれているような感じで、演じることが苦しみの連続でしたが、年齢を重ねると、自分で、こういうふうにやってみようかと考えるおもしろさが出てきた感じがします。たとえば『まあだだよ』（1993）では、戦争で焼け出された夫婦が三畳の小さな小屋で春夏秋冬を暮らす美しいシーンがありますが、黒澤明監督は、「あそこはラブシーンだからね」とおっしゃったのです。何もしないで二人で座っていることでお互いの夫婦愛を感じさせなきゃいけないというむずかしいご注文でした。ただそこに座っていればいいというものではなく、何十年も生きてきたその人の過去を感じさせないといけないんですね。

映画はスクリーンでみてほしい

このごろはテレビやDVDで映画を見ることが多いですが、ぜひ映画館に行って大きなスクリーンでみてほしいですね。最近も『近松物語』をスクリーンでみた若い方が、「小さな画面ではわからない細かなことがわかりますね」とおっしゃっていました。『杏っ子』（1958）のように、DVDがないのでスクリーンでないとみられない作品もたくさんあります。

私は自分のもっていた資料、アルバム、写真等を日本映画の歴史として活用していただければと思って、この東京国立近代美術館フィルムセンターに寄贈して、2011年にFIAF賞をいただきました。そのとき、フィルムセンターの相模原分館に案内していただいて、自分が出た作品のフィルムが棚に大事に保管されているのをみて、とても感動いたしました。

またこのごろは、自分が出演した作品が映画祭で上映されるときには、できるだけうかがってお話しさせていただいています。先日も『おかあさん』と『モスラ』が盛岡映画祭で上映されたので盛岡に行っていました。

映画をみなさんに大きなスクリーンでみていただくためにも、私は“語り部”として務めていきたいと思っています。

田井：『東京物語』の最後の場面で、自分の時間を止めていたような原節子が笠智衆に時計を手渡され、東京に帰っていくのを香川さんが見送るシーンがありますね。それと同様に、これからの時代を見守っていただけるのは香川さんではないかと思います。きょうはどうもありがとうございました。

(2014年10月22日)